

貧困削減・経済開発と国家の役割

白石 隆

日本貿易振興機構アジア経済研究所は、昨年十一月、ウイリアム・イースタリー（ニューヨーク大学教授）とシャヒッド・ユスフ（世界銀行経済顧問）を基調講演者に、世界銀行、朝日新聞と共催で、国際シンポジウム「貧困削減を越えて」を開催した。本号はこのシンポジウムの内容紹介を目的とする。

シンポジウムの趣旨はきわめて直截である。二〇〇〇年、国連ミレニアム・サミットでミレニアム開発目標が合意された。しかし、数値目標の達成度を見れば明らかな通り、十分な成果をあげているとはとても言えない。これは特にサハラ以南のアフリカについて言える。ではどうすればよいか。貧困削減を越える新しい援助とはどのようなものか。これを考えたいということである。

シンポジウムはわたしには大いに「教育的」効果があつた。ここで「教育的」というのは、このシンポジウムが「貧困削減を越えて」というテーマについていろいろ学ぶ以上に、普段あまり考えることのない問題を考えるきっかけになったからである。シンポジウムでどういう問題がどう議論されたか、それについては本号所収の記事を見ていただきたい。ここではこのシンポジウムをきっかけにわたしが考えたことを一つ述べておきたい。

歴史的に見れば、開発研究・発展途上国研究と地域研究は双子の兄弟のような関係にある。それはアジア経済研究所におい

てこの二つがその主たる研究領域となつていることにも見る通りである。しかし、この二つの領域においてその問題関心のあり方、世界の見方に関に大きな違いのあることか。それを見るには、例えば、国家の役割をどう考えるか、を想起すればよい。かつて一九六〇年代、歴史の見方、世界の見方として近代化論が圧倒的な力をもつていた頃、国民国家は経済発展のエンジンとされ、そうした国家の建設、あるいはそれを可能とする政治システムとはどのようなシステムであるか、これが政治発展論・政治近代化論の基本的な問いだった。しかし、いまでは、政治発展、政治的近代化といったことばは死語となり、おり、それにちよつど照応するかたちで開発研究においては国家の役割を問うということもなくなつたかに見える。

なぜか。その一つの理由は、発展途上国、特にサハラ以南のアフリカにおける国民国家建設の失敗にあるだろう。しかし、もう一つの理由は、社会科学において近代化パラダイムがほぼ完全に放擲され、グローバル化パラダイムにとって代わられたことにあるように思う。しかし、グローバル化で国家がなくなつてはならない。ではグローバル化の時代の国家をどう考えればよいのか。これはあらためて地域研究と開発研究の共同関心領域となつてよい。

（しらいし たかし／アジア経済研究所所長）